

児童期の性役割態度の発達

——柔軟性の観点から——

相 良 順 子¹

従来の性役割発達研究では、ステレオタイプの知識の獲得に重点が置かれていたが、本研究では、そのステレオタイプをどう評価するか、という態度を扱った。本研究の目的は、1. 子どもの性役割態度の発達を認知的、感情的側面から明らかにし、2. 性役割態度の発達に関連する要因を検討することである。542名の小学2年生、4年生、6年生を対象に、質問調査を実施した結果、1) 2年生から6年生の間、性役割ステレオタイプに対する認知的態度、感情的態度は年齢とともに柔軟になった。2) 4年生と6年生について、男子は、視聴するTV番組の数、父親の家事参加が認知的態度の柔軟性と関連し、親のしつけが感情的態度の柔軟性に関連していた。女子は、親が男性的な職業を期待することが認知的、感情的態度の柔軟性に関連していた。

キーワード：性役割態度、認知的態度、感情的態度、柔軟性、小学生

問 題

従来の幼児・児童期の性役割研究では、外見、活動、職業、性格特性に関するステレオタイプの知識の獲得について多くの研究が行われてきた。近年、子どもの性役割のステレオタイプの理解は、ジェンダースキーマという知識体系として捉えられている (Golombok & Fivush, 1994)。これによれば子どもはジェンダースキーマを通じて、性役割ステレオタイプの知識を体系化するだけでなく、ジェンダーに関する様々な情報処理を行うとされている。このように、子どもがその属する文化の性役割ステレオタイプをいつごろどういう内容で理解しているか、また、子どもはジェンダーに関する情報をどのように選択したり記憶したりするかに関しては多くの知見が積み重ねられている (e.g. Martin, 1989; Martin & Little, 1990)。

しかし、その一方で、性役割ステレオタイプに対して子ども自身がどう感じるかという評価の側面の研究は、その必要性が指摘されていたにもかかわらず (e.g. Huston, 1985) 現在も乏しいままである (Signorella & Liben, 1985; Levy, Taylor & Gelman, 1995)。性役割の評価的側面とは、性役割に対する自分の信念や感情といった、態度として考えることができる。本研究では性役割態度の発達と、それに関連する要因を検討する。

態度という社会心理学上の概念の定義は研究者に

よって異なるが、一般に、認知的要因、感情的要因、行動的要因の3要因から成り (野村, 1987)、ある程度独立した次元であるといわれている。性役割の領域では、認知的要因とは、性役割ステレオタイプに対する信念や価値観であり、感情的要因とは、ステレオタイプの行動や特性に対する好き嫌いの感情である。本研究では、認知的態度と感情的態度を扱う。

また、本研究では、性役割の態度を「柔軟性」という指標を用いて調べた。柔軟性とは、性役割に関しては、女性も男性も同じ行動 (e.g., 活動, 職業, 服) ができるということ、そしてかならずしも全女性や全男性が同じやりかたでふるまわなくてもよいことを認識する能力として考えられている (Leahy & Shirk, 1984; Martin, 1989; Levy et al., 1995)。すなわち、ステレオタイプが恣意的であるという視点で子どもの性役割の発達をとらえるものであり、発達研究の中では比較的新しい概念である (Serbin, Powlishta & Gulko, 1993)。従来の性役割研究では、子どもの性役割の認知がどのように伝統的ステレオタイプに一致するかという視点で捉えていた。この場合、価値観が多様化する社会の中での子どもの性役割認知の変化が表現されにくかったと考えられる。

柔軟性の測定には、一般に両方反応が用いられる (Alfieri, Ruble & Higgins, 1996)。具体的には、トラックの運転手に男性がなれるか、女性がなれるか、それとも両方なれるか、という質問をし、両方なれると答えた子どもはステレオタイプに対する認知が柔軟であると考えられる。

本研究の第1の目的は、認知的態度と感情的態度の

¹ 旧 お茶の水女子大学 人間文化研究科
現 文教育学部
Email: QZG13210@nifty.ne.jp

柔軟性の発達を検討することである。

性役割の知識が年齢とともに柔軟になることは、いくつかの研究で報告されている (Urberg, 1982; Leahy & Shirk, 1984)。Carter & Patterson (1982)は、年長の子どもは、年少の子どもより玩具や職業の性役割ステレオタイプについて知識が多く、しかもそのステレオタイプは文化によって異なることに気がついていることを示している。柔軟な態度の年齢による増加には、子どものこのような認知発達の寄与が大きいことが示唆されている。

しかし、子どもの認知的態度に関しては、学年が上がるにつれ柔軟性が増加するという明らかな解答は得られていない。認知的態度の発達的变化のパターンについて、Signorella et al. (1993)は、過去22年間の子どもの性役割の認知に関する研究をレビューして、性役割のステレオタイプに対する柔軟性は、幼児期ではステレオタイプの知識が十分でないため比較的高く、その後就学前まで減少するが、小学生以降は年齢とともに増加すると結論づけた。しかし、彼等のレビューした論文には、「～できるか」という質問も含まれており、性役割態度を聞いているのか知識を聞いているのか、区別が明確でない部分がある。性役割の知識とそれに対する自分の態度は、年少の時は区別しにくいだが、児童期では自分の価値観を形成し始めることから、知識と区別できるようになると予測される。Levy et al. (1995)は、「誰がするべきか (e.g., 誰がトラックの運転手になるべきか)」という質問は、評価的意味を持つとして、「誰ができるか」という質問と区別している。以上から、本研究では「～するべきか」という質問のみを採用し、小学校低学年でも理解できる「男女のうちどちらがした方がよいと思うか」という表現にした。

感情的態度とは、性役割ステレオタイプ行動に対する評価や感情 (たとえば、女性のトラックの運転手はきらいだ) を対象にする。女性のトラック運転手がいることを知っていることとそういう女性に対してどう感じているかは別問題である。感情的態度の柔軟性とは、性役割ステレオタイプに反する行動を受容できることを意味する。他人がその性に不適合な行動をすることに対して子どもがどう評価するか、という問題を扱った発達の研究がいくつかある。

Carter & McCloskey (1984)は、幼稚園児から6年生までの子どもにインタビューをして、性に不適合な行動をする同輩に対する態度を聞いた。その結果、どの年齢においても大多数の子どもはその同輩と一緒に遊ぶことを望まなかった。

また、Hort, Fagot & Leinbach (1990)は、4歳、9歳、19歳に異性行動をする同輩をどのくらい好きか、または他人はどのくらいいいこと (“OK”)だと見るかを聞いたところ、どの年齢でもステレオタイプに反する行動をする同輩に対して否定的な反応をした。Levy et al. (1995)の4歳、8歳、成人を対象にした研究でも子どもの反応は年齢に関係なく否定的であった。このように先行研究においては、認知的態度に比べて、感情的態度の年齢による変化は見出されていない。しかし、発達的に感情を扱った研究が少ないことから、この点はさらに確認する必要があると考える。

本研究の第2の目的は、柔軟な性役割態度に関連する要因を探ることである。

子どもが柔軟な態度を形成する過程のなかで、すでに個人差が生じている。この個人差は、子どもを囲む環境の中の様々な要因と子どもの認知発達との相互作用の中で形成されることは当然考えられることであるが、これらの要因の中で、主にどのような要因が性役割態度の個人差に寄与するかを検討する。

まず、環境要因として、両親の影響が考えられる。従来の性役割の獲得に関する理論では、幼児期を強調しているため、どれも親の、特に同性の親の影響が強調されている。児童期を対象にした最近の研究 (Sagara & Kang, 1998)でも、日本の子どもの性役割観は同性の親の性役割観との関連が強いことが報告されている。しかし、社会化の主体は、母親、父親だけでなく、同輩 (Langlois & Downs, 1980)、学校の教師、マスメディアと様々である。これらの要因のどれが子どもの性役割の認知的、感情的柔軟性の発達に相対的に大きく関連するか検討された研究は少ない。米国のKatz & Ksanskak (1994)は、子どもの感情的柔軟性に関連する要因として、親、兄弟に加え、マスメディア、同輩、教師を含む様々な要因を総括的に検討し、最も強い影響を及ぼしているのは、親や同輩であることを示唆している。わが国では、性役割に関して親や同輩、マスメディアの影響に関する研究は、青年期における性役割観の関連要因に関して伊藤の研究 (1997)がある程度であり、児童期の子どもを対象とした研究は見当たらない。

本研究では、性役割態度の認知面、感情面に関連する要因として、探索的に、親の子どもに対する期待、性別しつけ、父親の家事参加、同輩の男らしさ/女らしさ、遊びの好み、TVや本において傾倒する主人公との同一視との関連を検討した。また、子どもの認知的な発達の指標として、性役割特性に関する知識を取り

上げ、性役割態度との関係を検討した。性役割特性の理解は、児童期を通じて獲得されることから(東・田中・土屋, 1973), この理解の差が性役割態度の柔軟性に関係する可能性が考えられる。

方 法

予備調査

性役割のステレオタイプに関して、児童期を対象にした日本での最近の研究がないため、予備調査で尺度の項目を決定する必要があった。まず、職業に関して成人の持つ男性的、女性的なイメージを検討し、次に、子どもの性役割知識の発達を知るために、その発達の最終段階としての成人がどのような特性を男性と女性に帰属するかを調べた。下記尺度のうち、1回目は、1)職業イメージと2)ステレオタイプの特性は大学生を対象に3)ステレオタイプの遊び、反ステレオタイプの行動については小学生を対象に行った。

2回目の予備調査では、4)親の期待する職業を含めた全体の項目について小2, 小4, 小6の120名の小学生を対象に行った。

1)職業イメージの決定 小2でも理解できるような23の職業について、どのくらい「男性の仕事, 女性の仕事」としてのイメージを持っているか, 大学生(295名)に5段階で評定してもらった。得られた結果から、各職業について平均値を求め、その値を男性的、女性的職業として典型的である程度を示す指標とした。

2)特性の知識 東・田中・土屋(1973)で使用された特性項目を利用した。彼等の調査結果では妥当な結果が得られているが、25年前の結果であるので直接用いることは困難と考え、大学生対象に予備調査を行った。その結果、男性的特性、女性的特性のどちらか一方に有意に反応の片寄りのみられた10項目を選定した。

3)遊び、反ステレオタイプの行動の決定 男子と女子にそれぞれに典型的な遊びについてまず、10名前後の小学生(小2~小6)を対象に面接して決定した。反ステレオタイプの行動は、外見、活動、職業の3つのカテゴリーから成る。10名前後の小学生(小2~小5)に面接して項目を決定した。

4)親の期待する職業 上記1)の成人の職業イメージの中から、典型的に男性の仕事, 女性の仕事を8項目²選び、2回目の予備調査で子どもの反応を調べた。そ

² 選択した職業は、以下のようになる。()の値は尺度上の平均値を示す。スポーツ選手(1.2), 飛行機のパイロット(1.2), 医者(2.0), 弁護士(1.9), 幼稚園の先生(4.7), スチュワーデス(4.9), 看護婦(4.9)。

の結果、典型的に親が子どもに期待する男性の仕事として飛行機のパイロット, スポーツ選手, 女性の仕事としてスチュワーデス, 看護婦を選定した。医者は、尺度上では“どちらかと言えば男性的”であるが、特に、女子の柔軟な態度と相関が高いことが予備調査でわかり、本調査でも加えた。

本調査

対象 船橋市と市川市(千葉県の東京近郊地)の公立小学校3校の2年130名(男子68名・女子62名), 4年221名(男子109名・女子112名), 6年生191名(男子95名・女子96名)の計542名(男子272名・女子270名)。

質問紙構成

1)認知的態度

職業に関する7項目, 家庭での役割に関する5項目の計12項目を設けた。性役割に関する認知的側面は、一般に、職業, 活動(遊び, 余暇活動を含む), 性格特性が含まれる。職業や活動の知識はすでに、幼児期に獲得されているが(Huston, 1983), 性格特性のような複雑な知識は、それよりも遅れ、児童期に増加する(東ら, 1973)。本研究の最年少の対象者である小学2年生は、性格特性の知識の獲得過程にいと考えられるため、調査の項目は職業と活動に対する態度に限定した。得点は、ある特定のステレオタイプについて子どもに聞き、男の人と女の人を両方を選んだ場合、1点とする。得点が高いほうが柔軟性が高いことを意味する。

2)感情的態度

予備調査の結果、男の子のステレオタイプに反する行動として、1.着せ変え人形遊びが好き2.将来、幼稚園の先生になりたいと思っている3.口紅をつけているを選択した。女の子のステレオタイプに反する行動として、1.プロレスが好き2.将来、電車の運転手になりたいと思っている3.男の子の服を着ている、とした。「好きでない」から「大好き」(1~4)の4件法。

3)ステレオタイプの遊びの好み

予備調査の結果、男子の典型的な遊びとして野球, サッカー, 女子の典型的な遊びとしてはないちもんめ, ままごとあそびを選定した。各遊びをどのくらい好むか、「好きでない」から「大好き」(1~4)の4件法で評定した。

4)将来の仕事

将来就きたい仕事を聞いた。大学生によって評定された各職業の、性に典型的な程度の点が得点となる(1~5)。

5)親の要因

(1)親の期待する職業

ある職業に対して、父親と母親が子どもになってほしい程度を子どもに聞く。

「あなたのお父さんは、あなたが大きくなったら、次のような仕事をする人にどのくらいなってほしいと思っているでしょうか。」回答は、「なってほしくない」から「ぜひなってほしい」の4件法。

(2)親の性別しつけ

父親と母親が、どのくらい頻繁に「男らしく」/「女らしく」しなさいと言うかを聞く。回答は、「まったくいわない」から「いつも言う」の4件法。

(3)父親の家事行動

父親が家で料理、洗濯、掃除などの家事をしているかを聞く。4件法。

6)同輩

一番の親友を挙げさせ、その子がどのくらい男の子/女の子らしいか、反ステレオタイプの活動をどのくらい好きだと思うか、を聞く。4件法。

7)メディア

テレビ、本での好きな登場人物を挙げさせ、その男性または女性がなぜ好きなのかを聞く。自分と同性であり、男らしい、女らしいとされる特徴を理由として選択した場合に、同性の登場人物との同一性が強く、その人物の影響があると仮定する。

さらに、テレビについては、頻繁に見るテレビ番組の数を、テレビ視聴の指標とした。

8)ステレオタイプの特性の知識

10項目の男性性、女性性に関する項目に対する正答率を算出した。

手続き

調査はクラス担任に依頼し、すべて各クラス毎に集団で実施した。小2では担任の教師が質問を読みながら全員が同時に記入した。

調査は、1998年、9月～11月に実施した。

結果と考察

認知的態度の柔軟性 認知的態度尺度の構成を検討するために因子分析(主因子解-バリマックス回転)を行った。結果はTABLE 1に示す。小2,小4,小6の3群で大きな違いはなかったため、全員のデータで同様の分析を行った結果、2因子構造であることを確認した。第一因子は、男女に典型的な職業に関するもので、「職業」因子、第二因子は、家庭の役割に関するもので、「家庭内役割」因子とした。両因子に対して負荷量が低かった項目12(大工になる)を削除した結果、最終的な項目数は11となった。各項目の因子負荷量は、いずれ

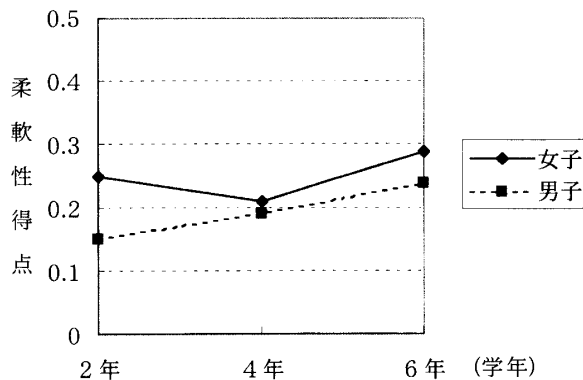
も.41以上であり、2因子であることが確認されたといえる。クローンバッハの α 係数は尺度全体で.66であり、ある程度の一貫性は保証されていると考えられる。

TABLE 1 認知的態度の因子分析の結果

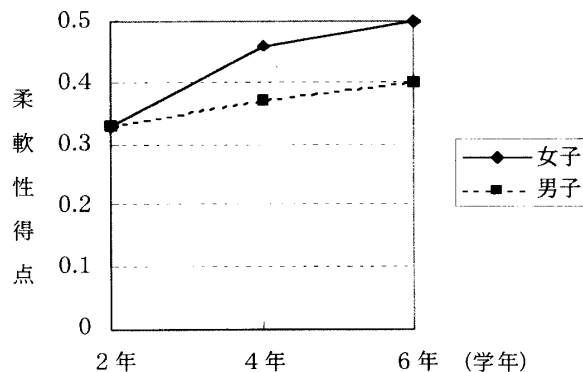
項目の内容	回転後の因子負荷量	
	I	II
11. ファッションモデルになる。	.662	.100
10. トラックの運転手になる。	.626	.229
7. 飛行機のパイロットになる。	.611	.046
9. 花屋になる。	.546	.299
8. ウェイトレスになる。	.438	-.019
6. お客さんにお茶をいれる。	.417	.063
3. 家のそうじをする。	-.072	.676
4. あかちゃんのせわをする。	.067	.594
2. 料理をする。	.307	.571
1. 家族のためにお金をかせぐ。	.086	.505
5. 家族でドライブに行くとき、車の運転をする。	.154	.502
因子寄与	2.00	1.80
因子寄与率	18.2	16.4

因子分析で得られた2因子は各項目数が異なるので、それぞれの因子の尺度得点を項目数でわり、平均値を算出した。この値の年齢による推移をFIGURE 1に示す。

各因子の尺度得点について年齢と性別の2要因分散分析を行った。職業因子(FIGURE 1-1参照)については、学年($F(2,535)=5.09, p<.01$), 性別($F(1,535)=6.45, p<.05$)の



1. 職業の柔軟性



2. 家庭内役割の柔軟性

FIGURE 1 感情的態度の柔軟性の発達の变化

主効果が、また、家庭内役割因子 (FIGURE 1-2参照) については、学年 ($F(2,535)=7.8, p<.001$) と性別 ($F(1,535)=10.1, p<.01$) の主効果がどれも有意であった。2因子とも交互作用はみられなかった。学年の効果については、Tukey法による下位検定の結果、職業得点は、2年生と6年生、4年生と6年生の差が有意 (5%水準) であり、家庭内役割得点は、2年生と6年生、2年生と4年生の差が有意 (5%水準) であった。子どもは、職業、家庭内の役割に対して、学年があがるにつれ柔軟な態度を持ち、男子より女子のほうが柔軟な態度をもっていることがわかった。この学年と性別の効果は、性役割知識の発達を扱った Urberg (1982) や Serbin, Powlishta & Gulko (1993) の結果と一致している。「男女ともしたほうがよい」で表現された認知的態度の柔軟性は、学年があがるにつれ高くなるということは、それが部分的に子どもの認知発達に負っているということを示している。性役割のステレオタイプが恣意的なものであること、ステレオタイプに当てはまらない例が存在することに気がついていくことが必要であるだろう。このような認知の発達を土台にしながら柔軟な認知的態度が形成されると考えられる。

さらに、職業と家庭内役割因子に共通して男子より女子のほうが高かった。性役割態度は男性より女性の方が非伝統的であることが多くの性役割研究で報告されており、それを確認する結果を得た。また、家庭内役割の方が職業よりステレオタイプに対する柔軟性の得点が高かった。これは、職業に対する態度より家庭での伝統的な役割分担に対する子どもの態度が流動的になっていることを示していると考えられる。

感情的態度の柔軟性 感情的態度の年齢による推移を FIGURE 2 に示す。

6項目の合計得点に対して、学年と性別について2要因の分散分析を行った結果、学年 ($F(2,531)=19.2, p<.001$) と性別 ($F(1,531)=69.9, p<.001$) の主効果が有意であった。学年があがるほど、また、男子より女子のほうが

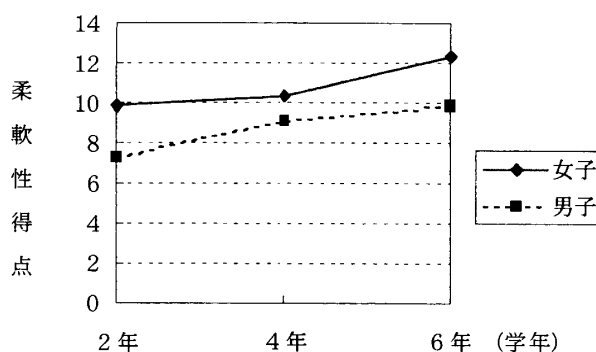


FIGURE 2 感情的態度の柔軟性の発達の变化

反ステレオタイプ行動を受容していた。交互作用はみられなかった。

Levy et al. (1995) の研究では、性にふさわしくない行動をすることに対して子どもは年齢に関係なく否定的である、という結果が得られているが、本研究では、彼等の結果と異なり、年齢の効果が得られた。この結果の不一致は、米国と日本という文化の差異が考えられる。しかし、研究の数が少ないため、感情的態度の年齢による変化は今後さらに検討するべき課題であろう。

認知的態度と感情的態度の関係 感情的柔軟性と認知的柔軟性との相関は、どの学年でも0.2~0.3前後の低い相関が得られた。

従来の発達研究では、性役割ステレオタイプの好みと認知間の関係は低い相関から中程度の相関が報告される場合が多く、高い相関はみられないので別の次元として捉えるべきであると主張されている (Down & Langlois, 1988 ; Katz & Ksanskak, 1994 ; Spence & Hall, 1996)。本研究でもこの主張を支持している。

関連要因の整理

性役割態度を規定する要因と考えられるものの内、相関が高い項目はまとめて、項目数を減らした。以下、その変数を挙げる。

1) 親の期待する職業

各項目について父親と母親の期待は相関が高かった (0.30~0.62) ので、父母の得点を合計して、親の期待点とした。各項目を因子分析 (因子分析-バリマックス回転) した結果、スポーツ選手、医者、飛行機のパイロットで1つの因子、また、スチュワーデス、看護婦間で1つの因子が構成されていたので、それぞれ男性職業期待、女性職業期待として合計を算出し、項目の数で割った値を男性的職業期待得点、女性的職業期待得点とした (レンジ2~8)。

2) 親の性別しつけ

父母からどのくらい頻繁に男らしく、女らしくするように言われるかを調べた。父親のしつけと母親のしつけは相関が高かった (男子 $r=0.70$ 女子 $r=0.47$) ので父母の得点の合計を性別しつけ得点 (レンジ2~8) とした。

3) 遊びの好み

男子用の遊び (野球・サッカー) と女子用の遊び (はないちもぬ・ままごと遊び) はそれぞれ男子用遊び、女子用遊びとして合計した (レンジ2~8)。女子においては、男子用遊びと女子用遊びの間に低い有意な相関がみられた ($r=.18, p<.05$) ので、男子用遊びと女子用遊びの差を指標とし、男女両方に対して用いた。

4) メディアの影響

(1)テレビ

好きな登場人物が、回答者と同性であり、かつ登場人物を好きな理由として男らしい、女らしいから、を選択した場合に、同性登場人物の影響があると仮定し、1点をつけた。それ以外は0点とした。しかし、同性の登場人物の影響がある群とない群で家庭内役割、職業への態度の柔軟性に差はなかった。

(2)本

テレビと同様の方法で得点化した。本の登場人物の影響を受けている群とそうでない群では柔軟性の差はなかった。

関連要因の検討

前記した関連要因のうち、認知的態度の柔軟性の2要因のどちらかと、また感情的態度の柔軟性と相関がある場合を重回帰分析の説明変数³として使用した。それらの変数の中で、認知的態度、感情的態度を規定する要因を探るため、それぞれについて前進後退法によるステップワイズ重回帰分析を行った。対象は親の影響を測定した4年、6年生⁴である

1) 認知的態度の柔軟性

親の男性的職業期待、女性的職業期待、同輩の男らしさ、女らしさ、同輩の男/女らしい遊びの好み、性格特性の理解、視聴するテレビの番組の数を説明変数とした。各要因ごとに各説明変数は、認知的態度と有意な相関がみられた変数である。認知的態度は、性と学年の影響を大きくうけており、また、性によってステレオタイプの好みに対する反応が異なるため、男女別に分析を行った。学年は統制変数として投入した。その結果をTABLE 2に示す。

まず男子の職業因子には、視聴するテレビの番組の数が有意な偏回帰係数を持ち、視聴するテレビの番組が多いほど職業に対する柔軟性は低いことがわかった。家庭内役割因子には、父親の家事参加が有意な偏回帰係数を持ち、父親の家事参加が多いほど子どもの家庭内役割は柔軟になることがわかった。

一方、女子では、職業、家庭内役割因子の両方に対して、男性職業に対する親の期待が有意な偏回帰係数を持ち、男性職業への期待が大きいと認知しているほど女子は柔軟な態度をもっていることがわかった。

男子において、視聴する番組を多く挙げる子どもほ

³ 変数間の相関関係は、どれも0.4以下であり共変動の疑いはないと考えられる。

⁴ 1回めの予備調査での面接において、2年生は、親が自分に期待していることが理解できなかったため、関連要因の分析から除いた。

TABLE 2 性役割観の回帰分析の結果

説明変数	職業		家庭内役割	
	男子	女子	男子	女子
性格特性の知識	—	—	-.13	—
父親の家事	—	—	.24***	.14+
親の男性の職業の期待	—	.20*	—	.21***
親の女性の職業の期待	—	—	—	.16
親の性別しつけ	—	—	-.14	—
同輩の遊びの好み	—	—	—	.16+
同輩の男/女らしさ	-.16+	—	—	—
視聴するTV番組の数	-.19*	—	—	—
学年	—	.15	—	—
F	4.1*	3.9*	3.6**	6.6***
R ²	.06	.06	.08	.18

注：最終ステップで投入された説明変数の標準偏回帰係数を示した。

ステップに残される変数の有意水準は、 $p < .15$ である。

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

ど職業の認知的態度が柔軟でないことに関しては、Signorielli & Lears (1992)の研究結果と一致する。彼等は、小学5、6年生のテレビ視聴と家庭の仕事の役割に対する態度を調べた結果、テレビ視聴が多いほど態度は伝統的になることを報告しているが、この関係も男子でのみ得られている。しかし、家庭内役割に対しては男子のテレビ視聴と関連がみられなかった。テレビの番組が伝統的なメッセージを送っていることはよく指摘されている (e.g., Sakamoto, Kitou, Takahira & Adachi, 1998)が、近年、ドラマなどで家事をする男性の描写が増加している影響かもしれない。テレビと性役割態度の関係を検討する場合は、社会的な役割としての職業と、家庭内の役割分担に対する態度を区別して検討する必要があるだろう。

2) 感情的態度の関連要因

感情的態度に関連する要因について、親の男性的職業期待、女性的職業期待、親のしつけ、同輩の男らしさ、女らしさ、本人の遊びの好み、同輩の遊びの好み、性格特性の理解、視聴するテレビ番組数を説明変数とした。結果をTABLE 3に示す。

男子の感情的態度の柔軟性に対し、有意な偏回帰係数が得られたのは、親の性別しつけであった。親が男らしくしなさいと頻繁に口にする、と子どもが認知するほど、子どもの反ステレオタイプの行動に対する反応は好意的であった。この一見矛盾した結果は、たとえば、親の頻繁な男らしさへの圧力に反発して反ステレオタイプに対して寛容になるのか、あるいは、もともと柔軟性の高い子どもほど親の性別への圧力に敏感になるということが考えられる。女子では、認知的態度と同様に、親の男性職業への期待が強いと認知しているほど異性行動に対する反応は好意的であった。男

TABLE 3 感情的態度の回帰分析の結果

説明変数	男子	女子
性格特性の知識	.12	—
父親の家事	—	—
親の男性の職業の期待	—	.36***
親の女性の職業の期待	—	—
親の性別しつけ	.22**	—
本人の遊びの好み	—	—
同輩の遊びの好み	—	—
同輩の男/女らしさ	—	-.17 ⁺
視聴するTV番組の数	—	—
学年	—	.20 ⁺
F	3.8**	8.8***
R ²	.11	.18

注：最終ステップで投入された説明変数の標準偏回帰係数を示した。

ステップに残される変数の有意水準は、 $p < .15$ である。

* $p < .10$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

女とも、親の要因が態度の柔軟性に大きく関連しているといえるだろう。

全体的考察

本研究の第1の目的は、児童の性役割態度の発達を検討することであった。その結果、認知的、感情的態度とも小2から小6にかけて年齢とともに柔軟になることがわかった。社会的学習理論では、性別化された社会での経験が増えればそれだけ柔軟性は減ると予測されていた(Beal, 1994)が、子どもの認知的発達による柔軟性の増加の方が強いことが示されたといえよう。

第2の目的は、性役割態度がどのような要因と関連があるかを調べることであった。その結果、男子と女子では、柔軟な態度と関連する要因が異なることがわかった。男子の要因は、態度の領域により異なっており、一貫した要因は認められなかったが、女子においては、「親の男性的職業に対する期待の認知」が一貫して柔軟な態度と関連する要因であった。親が女子に対してスポーツ選手や医者など性にこだわらない職業を期待することが女子が性役割に対して柔軟な態度をもつ重要な要因であることが示された。

子どもの性役割態度に対しては、本研究で取り上げた要因以外の多くの要因が影響を与えていると考えられる。今後、学校環境や教師との関連、テレビ以外のマスメディアの影響といった他の要因についてもその影響を検討することが必要であろう。

引用文献

- Alfieri, T., Ruble, D.N., & Higgins, E.T. 1996 Gender stereotypes during adolescence : Developmental changes and the transition to junior high school. *Developmental Psychology*, 32, 1129—1137.
- Beal, C.R. 1994 Boys and girls : The development of gender roles. McGraw-Hill, Inc : New York.
- Carter, D.B., & McCloskey, L.A. 1984 Peers and maintenance of sex-typed behavior : The development of children's conceptions of cross-gender behavior in their peers. *Social Cognition*, 2, 294—314.
- Carter, D.B., & Patterson, C.J. 1982 Sex roles as social convention : The development of children's conceptions of sex-role stereotypes. *Developmental Psychology*, 18, 812—824.
- Down, A.C., & Langlois, J.H. 1998 Sex typing : Construct and measurement issues. *Sex Roles*, 18, 87—100.
- Golombok, S., & Fivush, R. 1994 *Gender development*. NY : Cambridge University Press. (小林芳郎・瀧野揚三訳 ジェンダーの発達心理学 田研出版)
- Hort, B.E., Fagot, B.I., & Leinbach, M.D. 1990 Are people's notions of maleness more stereotypically framed than their notions of femaleness? *Sex Roles*, 23, 197—212.
- 東 俊子・田中久子・土屋和子 1973 性役割認知の発達 教育心理学研究, 21, 48—53.
- Huston, A.C. 1983 Sex typing. In P.H. Mussen & E.M. Hetherington (Ed.), *Handbook of child psychology : Vol.1* New York : Academic Press. Pp.258—296.
- Huston, A.C. 1985 The development of sex typing : Themes from recent research. *Developmental Review*, 5, 1—17.
- 伊藤裕子 1980 女子青年の性役割観と父母の養育態度—大学生の職経歴選択を中心に— 教育心理学研究, 28, 67—71.
- 伊藤裕子 1998 高校生のジェンダーをめぐる意識 教育心理学研究, 46, 247—254.
- Katz, P.A., & Ksanskak, K.R. 1994 Developmental aspects of gender role flexibility and traditionality in middle childhood and adolescence, *Child Development*, 30, 272—282.
- Langlois, J.H., & Downs, A.C. 1980 Mothers, fathers, and peers as socialization agents of sex-typed play behaviors in young children.

- Child Development*, **51**, 1217—1247.
- Leahy, R.L., & Shirk, S.R. 1984 The development of classificatory skills and sex-trait stereotypes in children. *Sex Roles*, **10**, 281—292.
- Levy, G.D., Taylor, M.G., & Gelman, S.A. 1995 Traditional and evaluative aspect of flexibility in gender roles, social conventions, and moral rules. *Child Development*, **66**, 515—531.
- Martin, C.L. 1989 Children's use of gender-related information in making social judgments. *Developmental Psychology*, **25**, 80—88.
- Martin, C.L., & Little, J.K. 1990 The relation of gender understanding to children's sex-typed preferences and gender stereotypes. *Child Development*, **61**, 1427—1439.
- Sagara, J., & Kang, R.H. 1998 Parents' effects on children's gender-role attitudes : A comparison between Japan and Korea. *Psychologia*, **41**, 189—198.
- Sakamoto, A., Kitou, M., Takahira, M., & Adachi, N. 1998 Gender stereotyping in Japanese television : A content analysis for commercials of 1961—1993. In T. Sugiman, M.Karasawa, J. H. Liu, & C.Ward Eds., *Progress in asian social psychology : Theoretical and empirical contributions*, vol.2. Seoul : Kyoyook-Kwahak-sa. Pp.201—212.
- Serbin, L.A., Powlishta, K.K., & Gulko, J. 1993 The development of sex typing in middle childhood. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **58**, 1—98.
- Signorella, M.L., & Liben, L.S. 1985 Assessing children's gender-stereotyped attitudes. *Psychological Documents*, **15**, 7.
- Signorella, M.L., Bigler, R., & Liben, L.S. 1993 Developmental differences in children's gender schemata about others : A meta-analytic review. *Developmental Review*, **13**, 147—183.
- Signorielli, N., & Lears, M. 1992 Children, television, and conceptions about chores : Attitudes and behaviors. *Sex Roles*, **27**, 157—170.
- Spence, J.T., & Hall, S.K. 1996 Children's gender-related self-perceptions, activity preferences, and occupational stereotypes : A test of three models of gender constructs. *Sex Roles*, **35**, 659—691.
- Urberg, K.A. 1982 The development of the concepts of masculinity and femininity in young children. *Sex Roles*, **8**, 659—668.

謝 辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました小学校の先生方、ならびに生徒の皆様に深く感謝致します。
(1999.1.28 受稿, 2000.1.13 受理)

Development of Attitudes Toward Gender Roles in Children : Stereotypes and Flexibility

JUNKO SAGARA (OCHANOMIZU UNIVERSITY) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2000, 48, 174—181

Research on the development of gender roles has focused narrowly on the acquisition of knowledge about the roles. The present study investigated children's attitudes as evaluative aspects of their stereotypes of gender roles. The objectives of the research were (a) to examine the development of attitudes toward gender roles from both cognitive and emotional points of view, and (b) to examine the effect of environmental factors on these attitudes in elementary school children in the second, fourth, and sixth grades (total N = 542). The results indicated that (1) the flexibility of children's attitudes increased with age, and (2) the frequency of watching television, and fathers' participation in homework were correlated with boys' cognitive attitudes, and the parental rearing measures were correlated with boys' emotional attitudes. For the girls who participated in this study, parents' expectations about jobs that have traditionally been men's work were correlated with the girls' cognitive and emotional attitudes.

Key Words : gender-role attitudes, cognitive attitudes, emotional attitudes, flexibility, elementary school children